

ウメ「紅サシ」の農薬費を削減

1 はじめに

安全・安心な農産物を求める消費者のニーズが高まっている中、化学合成農薬の使用を削減する技術が求められています。また、ウメの販売単価が低迷を続ける中、生産費の削減が重要です。

このたび、防除適期および農薬の効果を明らかにすることで、「紅サシ」の農薬費を削減する技術を確立したので紹介します。

2 休眠期の防除時期と薬剤

黒星病菌の分生胞子は、3月中旬から増加する傾向がみられ、それまでに分生胞子の増加を抑制する薬剤を使用することで、黒星病り病果の発生を抑えられます。

使用する薬剤として、水和硫黄剤の費用対効果が高いです(表 1)。水和硫黄剤と同じ系統の石灰硫黄合剤でも同等の効果が確認されており、平成26年産の福井梅の防除体系には石灰硫黄合剤が記載されています。

表 1 各種薬剤の休眠期散布の効果

供試薬剤	発病果率 (%)	コスト (円/10a)
ピラホストロビン・ボスカリド水和剤	25 (43)	910
水和硫黄剤	30 (52)	408
ジチアノ水和剤	49 (84)	422
フルアジナム水和剤	59 (102)	1,056
無防除	58 (100)	-

※2011年3月8日1回散布のみ/6月15日調査

3 着果期の感染時期と薬剤

黒星病菌の果実感染は、4月上旬から6月上旬にまで及び、特に4月下旬および5月10日前後にピークが認められました(図 1)。

使用する薬剤として、ジフェノコナゾール水和剤は60日、クレソキシムメチル水和剤は45日にわたり黒星病菌の感染を防ぐ効果が持続します。

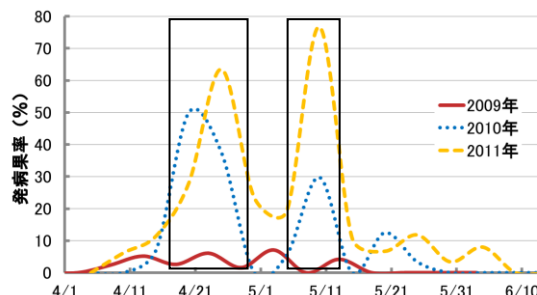


図 1 果実の時期別感染率(2009-2011)

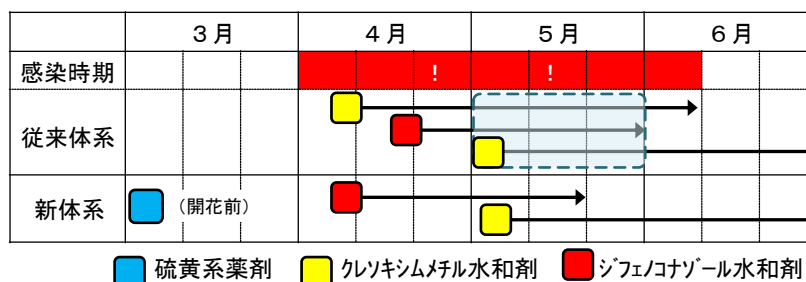
4 薬剤のローテーションとコスト低減効果

これまで黒星病に対して、3回の着果期防除が行われており、5月には3剤の残効期間が重なっていました(図 2)。それに対し、新たな防除体系では、硫黄系薬剤で黒星病の分生胞子の増加を抑制し、2回の着果期防除で果実を保護することで、黒星病り病果の発生を抑えることができます。

新たな防除体系により、最高2,000円/10aの農薬代を削減できます。

(福井県園芸研究センター

ウメ・果樹G 窪田博之)



■ 硫黄系薬剤 ■ クレソキシムメチル水和剤 ■ ジフェノコナゾール水和剤

※矢印は薬剤の残効期間、!印は感染ピークをあらわす

図 2 黒星病の新旧防除体系の比較